

2020 / 21 女子プロポイントランキング途中経過

# 3冠女王・姫路が早くもトップに!

2020年のプロボウリング界は、男女とも新型コロナウイルスの感染拡大によって公式戦の中止・延期が相次いだため、21年ツアーと統合して1シーズンとする特例措置がとられた。したがって20年終了時点のランキングはあくまでも途中経過だが、女王・姫路麗がポイント、アベレージ、獲得賞金の各部門で早くもトップに立ち、3シーズン連続4度目の3冠制覇を視界に捉えている。

昨年女子レギュラーツアー

は、新設の3大会を含む全8大会。うち6タイトルを姫路と坂本かやの2人が制し、各部門のランキングでも3位以下を大きく引き離している。

開幕戦の女子プロオールスターゲームで姫路を破り、待望のレギュラーツアー初勝利を挙げた坂本は、その後8カ月余りの長い中断をもとせず、再開直後の2大会(六甲クイーンズ、クリスタルカップ)も制して3連勝。昨年から補助器具(リストタイ)禁止の新ルールが施行

され、デビュー以来“素手”で投げていた彼女には多少のアドバンテージもあったが、どんなコンディションでも大崩れすることなく、全大会で上位入賞を果たしたのは成長の証。今年の活躍も間違いなさだろう。



▲3季連続4度目の3冠制覇に視界良好の姫路 (写真は関西オープン優勝時©JPB A)

その坂本にオールスターと六甲の優勝決定戦で連敗を喫した姫路も、終盤の3大会(APAキングス&クイーンズ、JPB

A★SSSカップ、関西オープン)で3連勝。関西オープンでは坂本に一矢報い、女王の面目を保った。正確無比なボールコントロールに加え、こ

この一番の気迫と集中力は他を圧しており、女王の座は当分揺るぎそうにない。

女子ツアーは今年もオールスターゲームから開幕の予定。新年早々の緊急事態宣言再発令

順位	選手名(期別)	ポイント	アベレージ	獲得賞金
1	姫路 麗(33)	4,065	219.58	6,730,000
2	坂本 かや(49)	3,623	218.25	5,446,000
3	松永 裕美(37)	2,504	215.31	3,008,000
4	丹羽由香梨(35)	1,705	208.98	1,375,000
5	久保田彩花(48)	1,473	210.15	1,468,000
6	川崎 由意(48)	1,453	213.14	1,985,000
7	霜出 佳奈(50)	1,408	212.41	1,204,000
8	小林よしみ(43)	1,349	210.97	2,345,000
9	本間由佳梨(46)	1,347	210.20	1,025,000
10	佐藤まさみ(42)	1,137	210.87	1,332,000
11	大嶋 有香(49)	1,093	206.31	1,320,000
12	小久保実希(47)	1,068	209.62	929,000
13	桑藤 美樹(45)	1,041	206.95	805,000
14	名和 秋(35)	960	210.39	851,000
15	板倉奈智美(36)	933	205.83	670,000
16	小池 沙紀(49)	889	208.30	891,000
17	岸田 有加(43)	810	208.44	600,000
18	中谷 優子(28)	792	208.00	691,000
19	寺下 智香(47)	693	206.00	592,000
20	大根谷 愛(45)	692	209.70	509,000

\*2020年終了現在。赤字は21オールスターゲーム初出場予定選手

に伴って開催日が2月から3月(20~21日、北小金ボウル)にスライドしてしまったが、昨年、姫路&坂本の間に割り込んでタイトルを獲得した川崎由意(大岡産業レディース)、小林よしみ(全日本女子プロ選手権)らの初出場も予定されており、今後の展開を占う上でも要注目

## BELL フェス×ラウンドワン LIVE 現地レポート

# 「LIVEチャレンジ」に垣間見えた新たな可能性

▲イベントに参加した(左から)棚橋谷合、加藤、藤井、鈴木の各プロ



1カ所に人を集めなくともイベントは開催できる——。1月30日、ラウンドワン南砂店を配信店舗として開催された「BELLフェス」とラウンドワンLIVEのコラボイベントには、北は北海道から南は沖縄まで、全国の系列店舗から133人のアマチュアボウラーが参加。大好評を博し、コロナ禍にあえぐボウリング界に新たな可能性を垣間見せてくれた。

☆

「BELLフェス」は2年前、JPBA承認大会として笹塚ボウルで第1回大会を開催。昨年も同所で第2回大会を予定していたが、新型コロナウイルスの感染拡大によって開催を断念した経緯がある。

だが、コロナ禍を理由にいつまでも立ち往生しているわけにはいかない。主催者である株式会社 BELL代表の鈴木馨プロ(51期)は、全国の系列店舗を映像と音声でつなぎ、遠隔対戦

を可能にしたラウンドワンLIVEシステムに着目。BELLフェスを同システムとのコラボイベントに模様替えすることで2年ぶりの開催にこぎ着けた。

ラウンドワン LIVEは当初、ライトユーザーである若年層の需要喚起を目途として2年前に導入されたシステムだが、のちに人気P★リーガーやアイドルタレントをゲストプレーヤーに招いての「LIVEチャレンジ」が定番のイベントに。残念ながらコロナ禍で中止となってしまったが、「ラウンドワンランドチャンピオンシップボウリング」2020年大会のアマチュア予選会(選抜大会)でも採用される予定だった。

### 初体験を楽しんだ3人のプロ

今回、鈴木プロは「男子のトッププロの投球術を見てもらいたい」と、谷合貴志(52期/レジェンドスター)、藤井信人(52期/ハイ・スポーツ社)、加藤祐

哉(43期/ABS)という、タイプも契約メーカーも異なる3人のタイトルホルダーをゲストに招へい。解説席に仕事仲間の棚橋孝太プロ(46期)を配し、参加者に3人の球質や使用ボールの特長などを映像と音声で伝えながらチャレンジ(3G)が進行した。

参加者もまた、投球の合間にチャット機能を使ってプロへ質問をぶつけていく。その内容は、ボウリングに関するいたって真面目なものから「藤井プロは普段、奥様(の浅田梨奈プロ=48期)のことを何と呼んでいるのですか?」などという、くだけたものまでさまざま。藤井プロは「通常のチャレンジと比べても参加者のコメントが拾いやすく、受け答えもスムーズにできた」という。

3人のプロはいずれもラウンドワン LIVE初体験。南砂店は「変化が激しくて難しい」(藤井プロ)コンディションで、3人



▲チャレンジは参加プロが解説&実況席からの質疑に回答しながら進行。参加者のスコアランキングはリアルタイムで更新され、ボウラーズベンチに設置された大型ビジョンで順位を確認することができる

ともスコアメイクには苦しんだが、存分に楽しんだ様子だ。

「頭で思い描いていたよりも進んだ内容でした。LIVEチャレンジは感染リスクも低いし、ボウリングの新しい楽しみ方なのかも」(藤井プロ)

「今の時代に合った方式ですね。いいスコアが出せなかったのが残念(苦笑)」(加藤プロ)

「コロナ禍でどんどん試合がなくなっていく状況のなかで、こういう新しいツールを使って自分のボウリングを披露できる

のはうれしいこと。今後この方式のチャレンジが広がっていくことに期待したい」(谷合プロ)

今回、主催者として裏方に徹した鈴木プロも「おかげさまで参加者にもセンターの関係者にも大好評でした。『もう一度、同じメンバーでやってほしい』という声もいただいています」と満足げ。ちなみに、同イベントは3月13日(土)、山本勲(44期/ABS)、鈴木理沙(41期/同)両プロをゲストに第2弾が開催される予定だ。



▲チャレンジ終了後はプロと上位入賞者が画面越しに懇談。ちなみに、この日のトップは山梨石和店から参加の小林義輝さんで、スコアは何と813だった!